

八代市厚生会館を巡る

10 疑問に の答えます!!

[2023年7月改訂版]

Q.01 八代市は、厚生会館は老朽化で「安全・安心を守れない」と言っています。大丈夫ですか？

A：大丈夫です。

厚生会館は、「耐震補強済み」の希少なモダニズム建築で、震度6強の地震でも大丈夫です。八代市が令和2～3年に実施した劣化度調査の結果によると、コンクリートの劣化度を示す「中性化深度」という指標が、「ほとんどゼロ（※3階の一部に劣化がみられた）」とされています。これは、**ほぼ劣化が進んでいない**ということであり、建築家らも驚く数値です。しかし、**市はこの重要な事実を公表していません**。専門家らは、必要なメンテナンスさえしていけば、「100年使い続けることは可能」と指摘しています。



Q.02 「劣化度調査報告」は、市長らに正しく伝えられているのですか？

A：伝えられていません。

その劣化度調査では「部分的なコンクリートの中性化や軽微なクラック（ひび割れ）等は確認されたが、（中略）大きな損傷や劣化はない状況である。構造体としては直ちに大規模な改修が必要な状況ではないと判断する」となっています。けれども、八代市が令和3年2月に「厚生会館のホール再開中止」を決めた政策会議（市長ら執行部が政策の根幹を決める会議）での資料では、「鉄筋腐食によるコンクリートの爆裂破壊が多数みられるため、外壁やバルコニーの大規模な改修が必要」となっています。劣化度調査報告とはまるで逆の内容が市長らに報告されています。この結果、「再開中止」が決まり、今回、「閉館」まで決まってしまったのです。



Q.03

市は、厚生会館を再開するための改修費は20億円と言っています。やっぱりいすれは20億円が必要なのではないですか。



A: 必要なのは、約7億円です。

厚生会館の内外を観察した建築の専門家によると、厚生会館を安全に再開するため「最低限」の工事は、—▽外壁タイル ▽外壁のひび割れ（クラック）▽屋根の防水 ▽吊り天井改修 ▽客席の一部がやや傾いていることに対する工事で、計約2億円。さらに、別館解体時に破壊された受電設備などの回復に約5億円（伝承館整備の際に実施されているはずだった工事。伝承館には厚生会館の受電設備を設置するためのスペースがあります）が必要で、合計7億円程度の投資で、再開可能です。もし厚生会館を解体するとなったら、これに近い費用がかかると思われます。

「最低限」の工事のうち、今の建築基準法に適合させる改修工事が必要です。実は市は2018年にいったん改修しようと設計予算を計上しましたが、結局、実施しませんでした。今回、改修費は8,800万円とされていますが、少しでも費用を抑えられる工法や補助金を検討した様子はうかがえません。

《参考》

- 客席の一部の傾きは、劣化度調査で「危険ではなく、快適に鑑賞できない座席」と報告されています。これも手当が難しいものではなく、減額可能です。
- 地下の水たまりについては、初めてそれを見た市議らが「驚いた」などと声高に言いますが、厚生会館がもともと八代城の濠の上に建っていることだから、それは想定されていたものであり、排水ポンプが設置されています。
- 市の言う「20億円」には、これらのはかに、舞台設備を最新設備に更新する費用やエレベーター、自動ドアの設置、座席を「リフォーム」ではなく全新調する、全LED化など、「すぐにやらなければいけないのか?」という改修項目が積み上げられています。舞台設備の更新はどん帳の上げ下げを自動化するというのですが、当面は手動のままでも古風で良いのでは?
- 照明のLED化もある自治体の大型ホールでは、毎日点灯させるものではないので、舞台照明の耐用年数とされる20年を大きく超えて40年以上も、LED化しないまま使い続けられています。
- 備品や設備類のメンテナンス費用は、どんな建物でも20年ごとにかかります。古い建物であろうが、これから新築する建物であろうが、備品・設備類のメンテナンス費は同じです。早く建て替えた方が得をするということはないわけです。減価償却を過ぎた古い建物は、ローンを完済した家と同じく、支払いが少ない可能性もあります。



Q.04

厚生会館は、耐用年数60年を超え、危ないではないですか。改修したとしても、さらに20年経過したら解体とも聞きました。本当でしょうか？

A: 100年超えも夢ではありません。

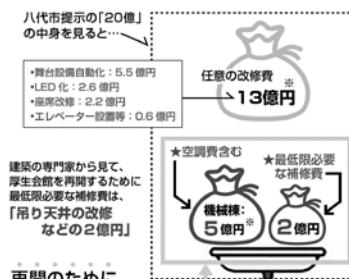
耐用年数の定義には、「法定耐用年数（固定資産税の計算に使われる）」と「物理的耐用年数（実際の「建物の寿命」）」の二つがあります。木造住宅の法定耐用年数は「22年」ですが、物理的耐用年数は一般に「65年」です。金波楼や松濱軒が法定耐用年数の22年を超えたからといって、「危ない。壊そう」とはなりません。鉄筋コンクリートの建物の法定耐用年数はかつて「60年」（今は「47年」）で、一方、実際の寿命である「物理的耐用年数」は、Q1で述べたように、コンクリートの中性化深度で決まり、球磨川の玉砂利を使った厚生会館のコンクリートは、今の状態から見て、20年後に劣化が急激に進むとは考えられません。

《参考》

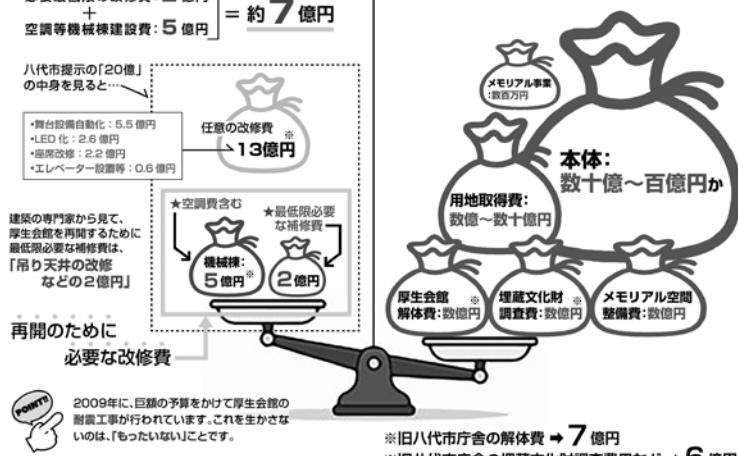
1920～30年代に建てられたホールでも、別府市公会堂（1928年）、日比谷公会堂（1929年）、宇部市渡辺翁記念会館（1937年）などは、建て替えではなく大規模改修をして継続的に使用することを選択しています。また、1959年開館の小松市公会堂等、耐震化工事はせずに天井だけ改修したホールもあります。この他、規模を縮小する方向での改修を決めたホール（岡崎市民会館：1967年）、市民に親しまれる施設としてオリジナル性を尊重して改修された事例（弘前市民会館：1964年）等、老朽化への対応は多様です。各自治体にとって、その建物がどのような価値があるのかという点も踏まえ、具体的な方法を検討していくことが求められます。

●厚生会館を改修しながら生かす場合

必要最低限の改修費：**2億円**
+ 空調等機械棟建設費：**5億円** = **約7億円**



●厚生会館を解体して、新しい大ホールを整備する場合



※旧市庁舎解体費7億円

※旧市庁舎解体、新市庁舎建設に伴う埋蔵文化財調査費など6億円（市役所も厚生会館も八代城跡の一角で「埋蔵文化財包蔵地」）

※新駅周辺は銅鐸が出てくるほどで、専門家は本気で発掘すれば「吉野ヶ里」になると指摘する遺跡の集積地。

※熊本城ホール整備費450億円

※辛島公園改修費は4億6,000万円

Q.05

エレベーターなどのユニバーサルデザイン化は、今の社会状況を考えれば、必要ではないですか？

A：市有の他の建造物同様、優先順位をつけて段階的に対応していくべきなのです。

ワンフロアでコンパクトな作りが厚生会館ホールの特徴です。今でも座席をはずせば車いす対応ができます。部分的にスロープを設けたり、段階的な改修をして行けばよいのです。毎日公演があるというわけではない厚生会館のエレベーター設置より、学校などのバリアフリー化の対応が優先事項であり、財政的なことを考えれば、長期的な計画を作成して改修していくことが重要です。

Q.06

今の座席の間隔では消防法に違反する、と聞きました。

A：1cm及び10cmずらすと良いだけで、2億2,000万円もかかりません。

横幅45cmは飛行機の座席と同じ寸法です。ただし劣化度調査の結果、熊本県建築基準条例と八代広域行政事務組合火災予防条例の基準に比べて、椅子の前後間隔が1cm、後列では約10cm程度不足しています。なので、改修が必要ですが、リフォームして1cm及び約10cmずらせばよいだけです。これにより現在の964席から約50席減りますが、乗り込み公演で収益をあげながら運営できる、八代市の身の丈にあった席数です。市の言う改修では1脚30万円もかけて新調し、さらに席数が約230席も減ります。その費用は約2億2,200万円。どうですか。

Q.07

市は閉館の理由として駐車場不足を挙げていますが？



A：駐車場には恵まれています。

別館解体によって敷地内の駐車場は増えました。一方、市内4ホールのあり方に関する市民アンケートでは、「免許を返納したので行かなくなった」などの声もありましたが、市は「駐車場不足」の回答だけを拾って強調しています。新しい市役所もでき、実は現状で厚生会館周辺は市の施設が有する、市民が無料で使える駐車場の集中地帯となっています。

Q.08

厚生会館がお荷物である、と言わんばかりの閉鎖・解体理由を市は発表していますが、そんなに赤字ですか？他のホールと比べたらどうだったのですか？

A：赤字か黒字かは運営に問題がありました。厚生会館は「稼げる」箱なのに、ちゃんと使ってこなかつただけです。

市内の他のホールでも大きな赤字が続く状況は変わりありません。ただ、厚生会館はかつて、ホールとしての特徴を生かして、しっかりと黒字を出していました。しかし、興業や文化ホール運営の知識も経験も（時にはその意欲も）薄い行政職員が数年おきに異動してくるような運営体制が続き、かつてのような黒字の回復は不可能でした。当会では、継続的な専門人材の確保など、運営改善に関する建設的な提言を行ってきました。

《参考》

厚生会館の別館を解体して作られた「伝承館」は予算ベースで3,000万円のランニングコストに対し、収入は203万円です。しかし、八代市はこれを「赤字」とらず、「文化の殿堂」の運営費令和3年2月26日の政策会議の議事録によると、市長は「厚生会館の改修には20億円かかり、維持管理に4,000万円、石巻に整備された1200人ホールは年間2億円の維持管理費がかかっている」ということを気にしています。また、鹿児島県は「公表されている値が確認できた37施設（コンベンション施設）については、黒字施設のほとんどは「政令指定都市」に立地しており、本県が分類される「その他」では、赤字（または行政支出を除いた場合は赤字となる実質赤字）が多い傾向にある。」「コンベンション施設にある音楽ホールの80%（4施設）が1億円以上の赤字」と分析しています。八代市の身の丈に合った規模の厚生会館と、2000～5000人規模のアリーナに付属したホールとを比較して、どう考えますか。

Q.09

文化施設である「厚生会館」に採算性を求めるべきでしょうか？

A:「社会教育施設」は採算性を求めるべきではありません。

八代市が平成28年に定めた「ホールの運営方針」には「入場者数や収益などの短期的な指標だけでなく、長期的な評価を積み上げるべき」とあります。社会教育の理念上、八代市は市民に「社会教育施設の設置」をする責務があります。「厚生会館ホール」は、小・中・高・支援学校の生徒たちに質の高い鑑賞体験を無料で提供するなど、社会教育施設としての役目を果たしつつ、その維持管理費を収入で補うことができた施設でした。

一方で、市が「厚生会館の機能を移転」しようとしている「文化コンベンションセンターのホール」は、「社会教育施設」ではなく「観光・商業振興施設」です。他の例を見ると、利用料金の高騰、駐車場料金の発生などによって、市民が利用を諦めざるを得なくなっています。施設の整備・維持は公金で行われ、**高額な施設利用料を払える資金力を持った民間営利企業が主な使用者になります。**一方で、広く市民に門戸を開き、教育や学びの場になる社会教育施設であれば、その収支の不足分は「赤字」ではなく、「社会教育費」です。文化庁の文化芸術振興費補助金、企業メセナ協議会などの補助事業もあり、これらを研究し申請することで、厚生会館を社会教育施設として活かす経費の縮減につながります。

《参考》

●八代市には厚生会館を含め4つのホールがありますが、桜十字ホールは指定管理、パトリア千丁は公民館扱い（興行で使用できない）となっていて、自主文化事業が行える箱は「鏡文化センター」と「厚生会館」のみです。厚生会館を使えなくしているので、7月23日に八代市は自主文化事業として「純烈」の公演を鏡文化センターで行っています。公演のコストは589万円、1枚5,000円のチケット収入が287万円、八代市が302万円を補填したことになります。「より広く、より安く」市民に芸術鑑賞の場を与える自主文化事業の数字としてはかなり疑問がありますが、この「302万円」は赤字でしょうか？八代市は「社会教育費」だと言うでしょう。

●複合施設の大ホール、例えば熊本城ホールの「メインホール」を非営利で使用した場合でも終日64～77万円の使用料。厚生会館は平日8万2,500円～10万2,500円。

Q.10

求める会は、ホール再開を求めるだけでなく、今後の使い方などの前向きな提案はあるのですか？



A: 厚生会館のポテンシャルを最大限に生かした「八代のブランディング」「地域振興策」について、さまざまな角度から具体的に提案しています。

昨年（2022年）11月に八代市に提出した提言書では、▼一流の音響や格式の高さに基づきつつ、中規模ホールだからこそ強みを生かした興行指向への転換 ▼人材の登用 ▼「ホール観」のアップデート ▼建物としての価値を前面に出した活用 ▼厚生会館の周囲は八代城跡や博物館、松浜軒、お祭りでんでん館など江戸時代～現代の名建築が集積したゾーンであることを生かした観光振興策 ▼芝生広場やホワイエ、ピロティなどを市民の集いの場として開放することによる活用 ▼周辺の史跡や施設、商店街を巻き込む形での「街フェス」の開催——などを提案しています。

*詳しい提言の内容についてお知りになりたい方は、事務局までご連絡ください。

LINE公式アカウントができました！



当会より活動の進捗等の情報を発信します。ぜひご登録ください。

『八代市厚生会館のホール再開を求める会』通信
号外資料

2023年7月30日発行

八代市厚生会館のホール再開を求める会

お問合せ／080-2747-1838
hallsaikai@gmail.com